



銀さんの『声』が聞こえた。

昼休み

病院裏の雑木林

通用口から小道が続いてる

話したい事があるんだ

来てくれ

ここは小児病棟。

トレーニング室は敷地の反対側にある。銀さんはそこに居る筈だ。

随分と離れているが、殉の能力を知った上で、よほど強く『叫んで』いるようであった。

繰り返し繰り返し、野太いダミ声が殉の脳裏に響き渡る。

こちらから返事は出来ないから仕方ない事ではあるが、幾度も続く木霊のような声に、彼は少し閉口していた。

トランシーバーじゃないんだから、後で話しに来てくれればいいのに

ひとしきり『声』は続き、やがてピタリと聞こえなくなった。

後にはノイズのような種々雑多な眩きが聞こえてくるだけ。

他愛ないお喋りを続ける殉の顔に、僅かな憂いの表情が浮かんできたのに気付く子供はいなかった。

普通じゃなかった、さっきの『声』は

訴えるような…誰にも聞かれないような…切実な想いに彩られた『声』

何かあったんだ、きっと

殉は抱えていた子供をそっと降ろすと、ちょっとだけ微笑んで病室を出ようとした。

その時だった。

「（おじちゃん、おにいちゃんを呼んでたんだよ！ あんなにおっきな声で！ 聞こえてたんでしょ？ おにいちゃんの声もちゃんと聞こえたもん！）」

女の子の声がキンキンと頭の中に鳴り響いた。

ドキリとして思わず振り返る。盲目の殉にはその子の顔など判る筈も無いのだが、反射的に振り返ってしまったのだ。

「うちだよ。おにいちゃん」

今度は生身の声が聞こえた。

下の方から、柔らかな小さい手が殉の右手を引っ張った。

「君は…」

「やだなあ、さっき一緒に折り紙したよ」

「確か…碧…ちゃん？」

「うん、みーちゃんていいよ♪」

少しずつ、少しずつ胸が熱くなってくる。

殉にとって初めての、同じ力を持つ者との出会いであった。

◇

三本目の煙草を携帯灰皿にねじ込んだ頃、ゆっくりと歩み寄る人影に気付いた銀さんは、もたれかかっていた木から軀を起こした。

「こっちだ、坊や」

「こんな風呼び出すなんて、銀さんらしくないですね」

「悪いな、人に知られず坊やを呼ぶのに、こんな方法しか思いつかなかったんだ。ちゃんと聞こえてたみたいだな」

「凄いダミ声で、ね」

笑いながら殉が言った。

「あれか、心の声って～のは、普段の声とおんなじに聞こえるものなのか？」

「ええ、モチロン」

「そっかあ～」

白衣のポケットに両手を突っ込んで、ブラブラと殉の周りを銀さんは歩き始めた。

「こうやって二人きりで話すのは久しぶりだな」

「あの夜以来ですよ」

「大事な話がある。誰にも聞かせられない話がな」

いつも飄々とした風情の銀さんに似合わぬ、重く沈んだ声だった。

「衣笠さんや九十九先生に、でしょ？」

「…やっぱり知ってやがったか。俺が何で坊やとお嬢を会わせないようにしてたか、とっくにお見通しだったんだろ」

銀さんの声が沈み込んでいた。

殉に対して明らかに負い目を感じている、そんな声であった。

少しの沈黙の後、殉が口を開いた。

「カナちゃんの治療に必要だったんですよね。僕は超能力者じゃない、みんなの『声』を少しだけ聞いただけ… だからそれ位しか知りません」

「すまねえ」

見えぬと判っていながら、銀さんは殉へ向かい深々と頭を下げた。

この子はみんな知っている、知ってて知らぬ振りをしている

このむくつけき年上の友人を傷付けないように

それが銀さんには痛い程判った。

こんな少年に気を遣わせている自分が恥ずかしかった。

情けねえ…

「そんなことはないですよ、銀サン」

殉が微笑みながら銀さんの手を握った。

「あなたが僕を、いつでも見守っていてくれた事…知ってました。お礼をいうなら僕の方ですって。情けないなんて思わないで下さい」

頭を下げたままの銀さんの背を、殉は何度も撫で続けた。

すまねえ

すまねえ…

二人の目の端に、高く昇った太陽が光の欠片を照り映した。

◇

杖を手にたたずむ殉の脇で、枯れ木の根に腰を下ろした銀さんが訥々と話し始めた。

「お嬢があんなになって、俺は戸惑ってた。口はばったいが、これでもニンゲンって奴は色々見てきたつもりだった。だがありゃあいけねえ」

パッケージのひと振りで煙草を出すと、軽くくわえて火をつけた。
澄んだ金属音がジッポから響く。

「正直、お手上げだった。坊やもそうだろう？ 俺に出来る事と言えば、おとなしくしている時にさっさとリハビリを終える事と、暴れたらとり抑える事、それ位だ。前のように、口がきけなくても何かを話しかけようとしていたあの娘は、どこか知らない所へいっちゃった」

「それは…僕のせいです。多分」

「なあ、あの夜いったい何があったんだ？ 今まで何度も、お前は曖昧に笑って答えようとしなかった。聞きてえ、いや聞かせてもらうぜ、今日こそ」

「話があるといって呼び出したのは銀さんじゃないんですか、ヤダなあもう」

今度は笑って逃げられなかった。

殉を斜め下から真っ直ぐに睨む銀さんの目からは、盲目の殉ですら感じとれる程凄まじい気が放たれていたのだ。曖昧な返事を許さない、有無を言わせぬ気迫。

無言のまま時間が過ぎ、殉が折れた。

「…まるで鶯の密林みたいでした、彼女の心の中は…」

ゆっくりと殉が話し始める。

そこで傷だらけの加夏子を見つけたこと
彼女を苦しめていたものを見つけたこと
それが彼女を襲った者の姿をした、彼女自身のトラウマであったこと
そして…

それが彼の兄とうり二つの姿形をしていたこと

銀さんが目を見開き、唾を飲んだ。

「カナちゃんは結局、あの男と僕を同一視して、僕を刺す事で恐怖を克服したんです。でもその代わりに誰も信じなくなっちゃった。それは多分、あの時の恐怖の裏返しなんじゃないかと思います。あの暴れようも同じでしょう」

「あの夜、血を吐いて倒れたのは…」

「彼女の中で刺されたから。心と軀って、嫌になる程結びついてますからね」

僕のせいなんですよと、自嘲気味な笑いを浮かべて話す殉の横顔は何ともいえず淋しそうであった。

僕があの時、動揺さえしなければ…

僕のせいなんです

「なあ。そいつは本当にお前の兄さんだったのか？」

少しの間を置いて、銀さんが聞いた。